

# 主題をとらえる力を高める指導の工夫

長岡市立希望が丘小学校 桑原 正大

## 1 目指す児童の姿

私は、高学年の物語文の指導において、児童が自分の力で作者が伝えようとしていることを読み取り、読み取ったことを自分の生活に生かすことができる姿を目指す。そのために、第5学年の学習では、主題（作者が読者に伝えたいこと）の読み取り方に重点を置いて指導する。そこで、主題のとらえ方を中心人物の変容やきっかけから考えるという学び方を提示し、その上で読者である一人ひとりの児童が根拠をもとに主題をとらえられるように本実践を行った。

## 2 単元について

### (1) 単元名

「主題をとらえて本のショーウィンドウで紹介しよう」

（『大造じいさんとがん』 棕鳩十 学校図書5年下）

### (2) 単元の目標

- ・ブックトークで紹介された棕鳩十の作品を読み、その作品の主題をとらえて本のショーウィンドウで紹介しようとする。【関心・意欲・態度】
- ・根拠を明確にしながら自分の意見を話したり、根拠を考えながら仲間の意見を聞いたりすることができる。【話す・聞く】
- ・とらえた主題が相手に伝わるように本のショーウィンドウにまとめることができる。【書く】
- ・人物の言動や情景描写から中心人物の心情の変化を読み取り、主題をとらえることができる。【読む】

### (3) 児童の実態

これまでの文学的文章の学習では、物語の設定や中心人物の変容、そのきっかけとなる出来事に着目させながら読み取りの指導を行ってきた。そして単元の終末に、「作者が読者に伝えたいことは何か」という児童にとって分かりやすい言葉に置き換えて主題を考えさせてきた。しかし、児童の考えた主題は、『トゥーチカと飴』の実践では、「こだわり」「粘り強く続けると願いは叶う」、『父ちゃんの凧』の実践では、「戦争はおそろしい」「平和の大切さ」など、抽象的なものや本文の一部を抜き出したものや根拠が明確でないものが見られた。

### (4) 単元について

棕鳩十の作品は、『大造じいさんとがん』を含め、登場する人物の崇高な行動によって、人間の精神のあるべき姿が示されており、物語の構成も類似する。そのため、動物と対峙する中心人物の変容から主題をとらえやすく、主題のとらえ方を学ぶ本単元の学習に同一作者の作品の多読が適している。

本単元では、これまで学習してきた「作者が読者に伝えたいこと」を「主題」という言葉に置き換えて指導する。しかし、本単元で主題のとらえ方を初めて学ぶ児童に、単に「中心人物の変容から主題を考えよう」と投げかけても、どのように考えたらよいのかが分からず、戸惑う姿が予想される。そこで、本単元の学習過程では、主題をとらえるときの手掛かりとなる「中心人物のはじめの姿 - きっかけ - 中心人物の終わりの姿」を読み取る学習を重視し、中心人物の変容を図式化する。そして、これまで読み取ってきたことを手掛かりに主題に合うキーワードを考え、一人ひとりが主題を表現す

る。椋鳩十の作品を多読し、このような読み取り方を繰り返すことで児童に主題のとらえ方を学ばせる。本単元では、「主題を考えよう」ではなく、「主題のとらえ方を学ぼう（中心人物の変容を手掛かりにした読み方）」を重視した学習を展開する。

(5) 指導の構想

① 単元で身に付けさせたい力

- ・ 中心人物の心情の変化を読み取り、主題をとらえる力
  - ・ とらえた主題を自分の言葉で表現する力

② 学習意欲を高めるための導入の工夫や学習内容と連動させた言語活動

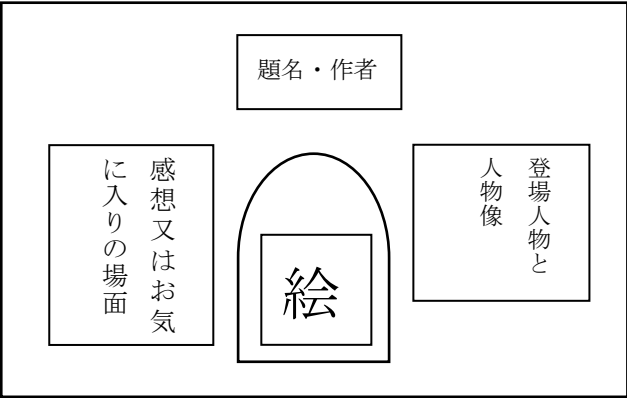
単元の導入において、動物が登場する児童文学作品を椋鳩十が310作品も書いており、名作と呼ばれる作品がたくさんある作家であることに触れる。そして、地域の図書館の司書の方から椋鳩十の作品をブックトークで紹介してもらい、椋鳩十の作品を読みたいという児童の思いを高める。その後、本単元で学ぶ『大造じいさんとがん』と出合わせる。この作品が60年以上も教科書に載って読み続けられている名作であることを伝え、名作と呼ばれる作品には、「読者の心を動かすメッセージがある」ことをおさえる。その「読者の心を動かすメッセージ＝主題（作者が読者に伝えたいこと）」を意識しながら物語を読み進め、椋鳩十の作品の魅力を本のショーウィンドウで、もっとたくさんの人に紹介しようという学習の見通しをもたせて単元をスタートさせる。

本のショーウィンドウに書く内容は、学習内容と連動させ、毎時間の終末に児童が学びのまとめとして本のショーウィンドウに学んだことを記録していくことにする。

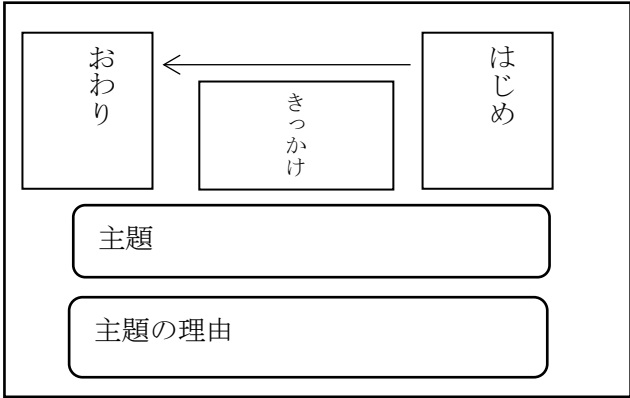
完成後の作品は、地域の図書館に展示し、本のショーウィンドウを通して地域に椋鳩十の作品を紹介したい。

本のショーウィンドウのイメージ図

表



裏



(6) 指導計画 (本時 8 / 12 )

| 次 | 時 | 主な学習活動                                                                                                                                     |
|---|---|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 0 | 2 | ①ブックトークを聞き、椋鳩十の作品に興味をもつ。<br>②主題という言葉とその定義を学び、本のショーウィンドウを作って発信するという学習のゴールや見通しをもたせる（学習ナビを作成）。                                                |
| 1 | 6 | ③『大造じいさんとがん』を読み、語句の意味調べをする。<br>④登場人物（中心人物と対人物）とその人物像を読み取る。（前話の提示）<br>⑤大造じいさんと残雪の戦いを表に整理する。<br>⑥大造じいさんの気持ちの変化を読み取る。<br>⑦大造じいさんの変容のきっかけを読み取る |

|   |   |                                                                                                                                               |
|---|---|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|   |   | ⑧大造じいさんの変容やきっかけをもとに、主題をとらえる。(本時)                                                                                                              |
| 2 | 4 | ⑨椋鳩十の他作品を読み、登場人物とその人物像、中心人物の変容とそのきっかけを自分でまとめる。<br>⑩同じ本を読んだグループで読み取った内容を確認する。<br>⑪グループで中心人物の変容ときっかけをもとに主題について話し合う。<br>⑫本のショーウィンドウを清書し、互いに読み合う。 |

### 3 本時の展開

#### (1) ねらい

教師が提示した主題の妥当性を検討する中で、これまでの読み取りをもとにしたキーワードを手掛かりに主題を考え、とらえた主題を自分なりに表現することができる。

#### (2) ねらいに迫るための手立て

- ①中心人物の変容やきっかけの間違い探しに取り組ませる。
- ②主題としてふさわしくない文を提示し、その文が主題として妥当かどうかの根拠を明確にして検討させる。
- ③主題に使えるようなキーワードを考えさせる。
- ④中心人物の変容とそのきっかけを図式化する。
- ⑤「作者が私たちに伝えたいことは主題である。誰の どんな姿から主題だと考えた」という型を与え、発表時にそれぞれを項目ごとに整理して板書する。
- ⑥仲間がとらえた主題の理由を学級全体に問い、自分と異なる考えを理解させたり、同じ考えを共有させたりする。

#### (3) 対象児 (A 児) について

読書が好きで、授業の合間や給食の準備を待っている時間に本を読んでいる。そのため、文字を読

むことには抵抗なく取り組むことができるものの、自分の考えをもつことに苦手意識をもっている。それは、直接的に描写されている文章ばかりに目が向き、大事な言葉に注目しながら自分の言葉で考えをまとめることを苦手としているからである。そこで、ペアで活動する場面を設定したり、キーワードを手掛かりに主題を考えさせたりする中で、苦手意識を少しでも取り除くようにする。

本時では、「作者がわたしたちに伝えたいことは、主題である。誰の どんな姿から 主題だと考えた」という型を与えたり、代表児童に例として発表させたりして、自分の考えを書きやすいような手立てを講じる。それにより、授業に参加し、自分の考えを言語化して発信できるようにしたい。

### 4 授業の実際

#### (1) 物語の内容として正しくても、始めの内容だけや中心人物の終わりの姿だけでは主題にならないだね

まず、中心人物の変容やきっかけから本時で着目させたい言葉をあえて間違えて提示した(仲間を助け⇒仲間を見捨て、がんの頭領⇒がんの下っ端、正々堂々⇒ひきょうな手)。どの児童もすぐに間違いに気付き、正しい表現に即座に直すことができた。

次に、教師が作成した主題「残雪はいまいましい鳥である」「動物はつかまえても逃がすことが大切である」を提示した。これらの主題については、「残雪をいまいましいと思っていたのは始め

だけ」「大造じいさんは狩人だからいつも動物を逃がすわけではない」という児童の発言があった。そこで、中心人物の変容を図式化したもの（図1）に照らし合わせながら、物語の内容として正しくても、始めの内容だけや中心人物の終わりの姿だけでは主題にはならないことを確認した。

授業の導入で行ったこれらの学習活動は、「間違い探し」という児童にとって容易な課題が「今日の学習も自分にできるかもしれない」との意欲を高めることにつながった。また、主題としてふさわしくない文を提示することで「主題は、中心人物の変容やきっかけから考える」ということを全員で確認するとともに、「本当の主題は何だろう」という問いをつくることにつながった。

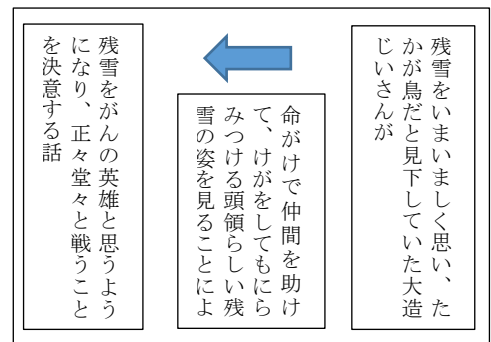


図1 中心人物の変容を図式化したもの

## （2）キーワードから主題を考えるとよさそうだよ

問いが出た後、教師が作成した3つ目の主題「仲間おもしろい」を児童に提示した。すると、児童から「さっきのよりいい感じがする。」「中心人物の変容と合っている。」と肯定的な意見がたくさん出された。しかし、一部の児童からは、主題として「短い」との意見が出され、肯定的な児童の意見が揺さぶられた。そこで、「仲間おもしろい」は、主題に使えるような言葉、つまり、作者が伝えたいことがギュッと短く一言で分かる、主題に使えるようなキーワードであることを教師が押さえ、「ペアで主題に使えるようなキーワード探しをしよう」と児童に投げかけた。

A児は、文章の直接的な表現に着目することができるものの、行間を読んだり、中心人物の変容から読み取れることは何かを考えたりすることに苦手意識をもっていた。そのようなA児は、本時のペア活動で、隣の子が提案した「英雄・頭領らしい・堂々たる態度・勇気がある」について、「どこからそう思うの?」と問い返ししながら相手の答えに納得したり、教科書を見て「ただ救わねばならない仲間の姿があるだけでした（文章の直接的な表現）は?」と提案し、「それじゃ伝わらないよ」という相手の言葉を受けて、「そうか」と納得し、新たなキーワードを探すために黒板や教室の掲示物を見回したりした。自分の考えをもつことに苦手意識をもつA児は、自分の意見を臆することなく相手に伝えることができた。相手の反応を受けて自分の考えを見直すことができるペア活動は、主題を自分の言葉で書き表す前の活動として有効であった。A児は、全体発表の場で他の児童が発言した「優しさ・あきらめない・粘り強い」をノートに書き加えた。この活動後、A児のノートには、主題に使えるようなキーワードがたくさん書き残された。

## （3）話型に当てはめることで主題の理由を考えることができたよ

全体発表で主題に使えるようなキーワードを全員で共有した後、話型「作者が私たちに伝えたいことは主題である。誰の どんな姿から主題だと考えた」を提示し、それぞれの児童が自分で主題を考える場を組織した。その際、キーワードはそのまま使うのではなく、足りない言葉を補ったり、複数をつないだりして考えるように児童に促した。

A児は、単元の導入で『大造じいさんとがん』の主題を問われた時、「分からない」と答えた。しかし、本時では、ノートにある主題に使えるようなキーワードの中から自分が使いたいものに丸を付け、提示された話型に当てはめて以下のように主題をとらえた。

主題：優しさと勇気を持って正々堂々と戦うこと

理由：残雪が仲間を助けて、はやぶさにぶつかっていったすがたから主題だと考えました。

A 児は、板書、ノート、教科書をじっくりと時間をかけて読み直していた。書いては消してゆっくりと時間をかけながらも、自分の言葉で主題をとらえることができた。

## 5 成果と課題

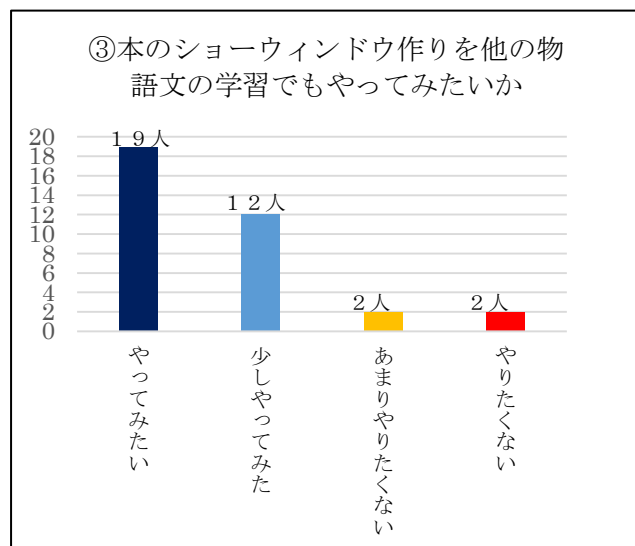
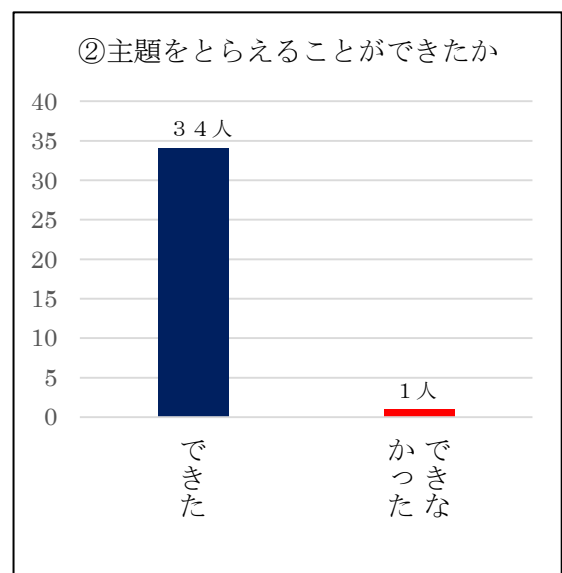
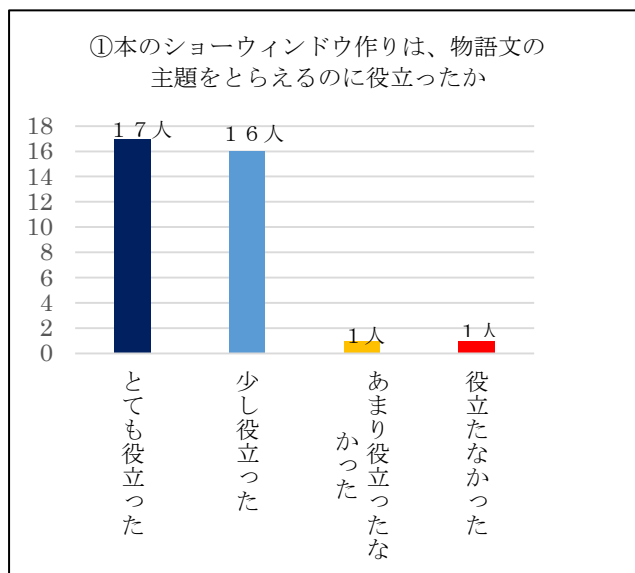
### (1) 成果

A 児は、『大造じいさんとがん』の学習後、椋鳩十の『赤い足あと』を読み、この作品で改めて自分の力で主題をとらえることを目指して、本のショーウィンドウ作りに取り組んだ。そして、自分でとらえた中心人物の変容を図式化したものから、主題に使えるようなキーワードを抜き出し、再び自分の言葉で主題をとらえることができた。

A 児の単元の振り返りは、以下の通りである。

本のショーウィンドウ作りを通して、物語の主題をとらえることができるようになったのでよかったです。そして、とらえた主題に自信をもてるようになったのでよかったです。

また、単元終了後に行った振り返りのアンケートは、以下の結果となった。(児童数 35 名)



単元導入時、『大造じいさんとがん』の主題を「分からない」と答えた児童が13人いた。また、主題が教科書の本文の抜き出しであった児童が10人、物語の内容から逸れた主題をとらえていた児童が4人いた。主題を正しく自分の言葉で書くことができた児童は、わずか8人であった。

本単元の学習を終えて、学習の振り返りアンケートの中で「主題をとらえることができた」と答えた34人の児童が『大造じいさんとがん』の主題とその理由を自分の言葉で表すことができた。

これらのことから、本のショーウィンドウ作りと主題の読み取りに向けた学習活動を連動させることは、主題をとらえるための学習や単元を通して学びのエネルギーを持続させることにとても有効であった。また、このような言語活動は、その後の物語の学習にもすぐに生かしていくことができる点においても十分に子どもの学ぶ価値がある学習活動であると言える。

## (2) 課題

本時では、とらえた主題を全体の前で発表する場面において、主題は人によってとらえ方が違う、主題は同じでも理由が違うという視点を獲得することができた。しかし、それぞれの児童がとらえた主題を検討する時間が十分ではなかったため、一部の児童の発言で終わってしまい、学級全体で仲間の考えを共有したり、自分がとらえた主題を見直したりすることができなかった。今後は、自分が選んだキーワードやとらえた主題を仲間と交流させ、言葉を付け足したり、考え直したりして、とらえた主題をより深めていくことを目指したい。

また、今回の教材である『大造じいさんとがん』では、主題に使えるようなキーワードを考えさせた時点で「大造じいさん（中心人物）」と「がん（対人物）」の両者の立場から児童が主題をとらえていき、主題の理由も双方のものが出された。しかし、現時点では、「主題は、中心人物の変容やきっかけから考える」という前提で学びをスタートさせている以上、中心人物である大造じいさんの変容やきっかけに沿って主題をとらえることが大事であった。よって、「ひきょうなことはせず、優しさと勇気をもって堂々と戦うこと」という主題の理由には、本時で児童が発言した「残雪のはやぶさと一生懸命に戦っている姿から」ではなく「残雪とはやぶさの戦いを見た大造じいさんの命がけで戦う残雪の姿に心を打たれた姿から」等の理由をしっかりと書けるように今後の指導を工夫していきたい。

